

明治後期の九州中部山村における生産と消費

牧野 洋 一

一、序言

九州中部山村についての研究は、すでに上野福男¹⁾、佐々木高明²⁾、三浦保寿³⁾、千葉徳麟⁴⁾、山本正三⁵⁾の諸氏などのすぐれた研究が蓄積され、筆者も九州中部山村の社会や焼畑に着眼して山村の社会構造と関連づけて論じたことがあった。これらの研究は焼畑耕作や山茶に焦点をおいた研究であったり、江戸期を中心にした山村の歴史地理学的研究であった。またそれらの研究がある地域のインテンシブな調査であったために、九州中部山村について広く比較検討を加え概観を与えるにはまだ充分でなかったように思われる。そこで本報では九州中部山村が、明治二二年の町村制施行以来、それぞれ独自の道を歩み始めた明治後期（明治三〇〜四五）に焦点をおき、何を生産し消費する村々であったかを調べ、山村の性格を明らかにしようとした。昭和五五年頃まで残存していた焼畑経営を行う山村の村落構造を鮮明にするには、焼畑経営がかなり盛行していた明治後期の村落構造をまず理解することが必要である。今回の調査では従来とすればあまり取りあげられなかった消費の側面をも明らかにし、

生産と消費の両側面から山村生活の特徴を把握しようと努めたことである。消費の分野についての地理学的研究は、ピエール・ジョルジュ⁷⁾が「消費の地理学」を著わしてからも、あまり盛んではないように思われる。その理由は消費面に關する資料が得にくかったこともあるが、やはり消費の地域差に關心を向けることが少なかったからであろう。

資料は明治三〇〜四〇年頃に各町村役場で刊行された町村誌⁸⁾を使用した。町村誌には当時の町村の生産量の他に消費量が記され、これは貴重な資料となっている。町是や村是の資料はその所在がまだ充分には知られていないようであるが、筆者は昭和五〇年八月以降九州地方の郡是・町村是の所在について調査を進めている。現在までに郡是と町村是についてその所在が判明した数は次の通りである。福岡県一六二、熊本県四六、大分県三六、宮崎県三四、鹿児島県二二、佐賀県四、長崎県一である。福岡県は郡是・町村是の最も多く刊行された県であり、新潟、茨城、熊本、岩手、大分、宮崎、鳥取の順で刊行が多く行われた。この中でも町村是の抽出については確認されたものの、その所在が不明であるものが数多くあり、当時の資料が少ないこともあって、是若町村是の所在を明らかにする必要があるだろう。この町村是調査書については、調査書のとおり方に批判もあったが、こうして残された資料をみると、当時の町村の実態がある程度把握できるため貴重な資料と言えらる。

九州中部の山村としては水田率一五%以下、耕地率三三%以下の町村是の存在する村から選定した。その理由は耕地率一〇%以下の村が一応山村として適当だと考えられるので、耕地率三〇%以下と

表1 明治後期の九州中部 山村の土地利用

旧村名	現町村名	調査年	戸数	人口	面積	田	畑	焼畑	山林	原野	雑地	宅地
		(年)	(戸)	(人)	(町)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
宮崎県 椎葉村	椎葉村	明治38	1045	6383	4217.8323	3.0	0	95.2			0	1.8
" 岩戸村	} 高千穂町	" 38	678	4299	2590.7005	3.3	22.8		47.8	24.6	0	1.5
" 上野村		" 38	489	2922	1620.7708	4.5	24.5		26.2	42.8	0	2.0
" 鞍岡村	} 五ヶ瀬町	" 38	376	1833	1596.6313	11.1	13.8		30.5	43.4	0	1.2
" 三ヶ所村		" 38	610	3451	3192.8102	3.9	10.6	16.5	41.3	26.5	0	1.2
" 七折村	日ノ影町	" 38	651	4361	3553.6007	2.1	7.4	25.7	53.8	9.9	0	1.1
" 諸塚村	諸塚村	" 38	606	4362	8397.8724	0.9	2.8	76.0	19.1	0.9	0	0.3
" 西米良村	西米良村	" 40	525	2598	3537.1620	3.2	19.4		73.9	3.0	0	0.5
熊本県 南小国村	南小国村	" 34	984	5003	4487.5525	11.6	9.5		28.6	45.7	3.3	1.3
" 柏村	蘇陽町	" 34	654	2970	5345.6821	3.5	20.0		40.5	33.9	0.9	1.2
" 山西村	西原村	" 34	609	3229	4337.9027	4.0	18.8		14.3	59.7	3.2	1.0
福岡県 矢部村	矢部村	" 30	756	4220	2755.4219	5.7	3.6	88.1	1.6	0.1	0	0.9

注) 資料は各村足による。面積は地租対象としての面積である。鞍岡村の実面積は7500町、西米良村は27185町である。山林・原野の面積が実面積より過小に評価されている。

いりのは、実質的には一〇%以下と考えられるからである。町村是記載の地積は地租対象としての面積であり、その場合山林と原野の面積が実面積より著しく過小に評価されているためである。また畑面積の中には焼畑面積も含まれている村があるので、水田と常畑を合計した耕地の割合はかなり低くなるであろう。こうして選定された山村は、高崎県西臼杵郡岩戸村、上野村(尙村は現高千穂町)、鞍岡村、三ヶ所村(尙村は現五ヶ瀬町)、七折村(現日ノ影町)、諸塚村、椎葉村(現在東臼杵郡)、同県児湯郡西米良村、熊本県阿蘇郡南小国村、柏村(現蘇陽町)、山西村(現西原村)、福岡県八女郡矢部村の一二ヶ村である。熊本県球磨郡や八千郡の山村は資料がないためとりあげなかった。

次に使用した「村是」の調査および発行年について述べておきた

い。矢部村是(調査及び編纂期間、明治三十一年十二月五日〜二十五日)、南小国村是(明治三十六年五月五日〜十二月二日)、柏村(明治三十五年十一月〜三十六年六月)、山西村(明治三十六年五月二〇日〜十一月一〇日)、椎葉村(明治三十九年七月三〇日〜四〇年十二月一日)、西米良村(明治四一年一〇月五日〜十二月八日)、鞍岡村(明治四〇年十二月)、諸塚村(明治三十九年一〇月〜十二月)、七折村(明治四〇年十二月)、三ヶ所村(明治四〇年八月)、岩戸町(明治三十九年十一月〜四〇年三月)、上野村(明治三十九年一〇月〜四〇年十二月)となっている。村是の中に記された統計類は調査時期の前年もしくは前々年の統計資料を使用したと思われる、各村是に記された統計類の調査年を次のように判断した。すなわち矢部村(明治三十四年)、南小国村、柏村、山西村(以上三ヶ村は明治三十四年)、諸塚

村・岩戸村・上野村・椎葉村（以上四ヶ村は明治三八年）、鞍岡村・三ヶ所村・七折村（以上三ヶ村は明治三八年）、西米良村（明治四〇年）である。

二、山産物・商品作物の生産と消費

明治後期の九州山村において一体何が生産され、他へ移出されたのであろうか。移出額の多いものを順次あげると、木材・米・しいたけ・茶・大麻・タバコ・木炭・楮皮・清酒・牛・とうもろこし、こんにゃく・馬などである。この中で商品作物として山村に導入されたのは大麻とタバコである。また米が現金収入源としての重要な作物であることがわかる。米が多く移出された山村は南小国村、鞍岡村・山西村・岩戸村・上野村・三ヶ所村である。逆に米が移入された山村もあるが、あまり多くはなく、矢部村・諸塚村・椎葉村が該当するが、移出額に比べると少ない。

明治後期には、九州中部の一二の山村の中にはまだ林業村としてその性格が明確であったものはなかったようである。しいてあげるならば西米良村がそれに属するが、西米良村はその後小国林業の一部として発展した南小国村に遅れをとり、林業村としては発展しなかった。当時搬出された樹種としては杉・もみ・けやき・松・つが・竹などがあったが、杉材の生産が当時でももっとも盛んであった。杉材を移出した村は南小国村・矢部村・山西村などであって、一二の山村の中でも北部の山村であった。林産物の中には西米良村のもみ萩、椎葉村の萩木のように若干加工されたものもあったが、ほとんどは原材のまま移出され、それらの搬出には流し山師が相当活躍

していた。

村是によれば、将来計画としてとくに林業に力を入れようとしている村がある。矢部村は将来七ヶ年の植林計画として杉（二〇〇町歩）、檜（四〇町歩）を計画している。また柏村は林業の取得を三〇ヶ年間で六〇〇〇円としている。山西村ではとくに生育期間の短い桐樹植栽を奨励し、五年後に伐採売却する時は一本の価格三〇銭と仮定するとかなりの取得が期待されるとしている。これらの村を除けば林業は約三〇年間の長期計画が必要であるし、町村是による行来の方針の中には短期的なものがより重視されている。木炭はし折村でもっとも多く移出され、西米良村、岩戸村、柏村でも若干移出されたが、これも村是の中の将来計画の中ではあまりとりまけられなかった。

一二の山村の中で商品作物として導入されたのは、タバコと大麻である。葉タバコの生産地としては三ヶ所村、上野村、岩戸村、柏村、山西村がある。これを刻タバコとして製造している村は三ヶ所村、上野村の二村で葉タバコの移出について刻タバコの移出額が多い。葉タバコは在来種の生産が行われ、柏村と上野村で葉タバコの作付面積が多く、それぞれ八〇町歩前後であり、三ヶ所村、岩戸村が四〇町歩余であった。三ヶ所、上野、岩戸の三ヶ村は葉タバコの移出総額が刻タバコ、巻タバコの移入額を上回り、葉タバコ生産地としてよく知られていた。三ヶ所村では大字桑野内が畑地が多いことから葉タバコの特産地であった。三ヶ所村は是によると、反当町草は九町で、高千穂村が二三町四八銭、福徳縣朝倉郡上野のタバコ産地では三〇〇五〇となっていて、三ヶ所村の反当町町取穂額を算し

く低いことが指摘されている。上野村是によると、明治三六・三七年の耕作反別が八〇町歩、三九年が七七町歩、四〇年が五〇町歩余と減少しており、タバコが大麻につき重要な商品作物であるところから、タバコ作の減少を憂えている。

山産物として代表的なものは、茶、しいたけ、こんにゃく玉、楮皮などである。茶の移出額の多いのは矢部村・諸塚村・椎葉村であり、三ヶ所村・南小国村でも移出された。当時の茶は焼畑造成地に自然に発芽した山茶が大部分であり、紅茶やウーロン茶などの製法も研究されたが、結局緑茶の製法を習得して緑茶が移出された。しいたけは矢部村・山西村を除く一〇ヶ村で主な移出品目となっていた。岩戸村・諸塚村が移出品目の上位一・二位を占めたが、当時は鉈目式栽培法で大量には栽培できなかった。こんにゃく玉(いも)の生産地は矢部村・諸塚村・柏村でその多くを移出した。楮皮は矢部村・七折村・西米良村・諸塚村・椎葉村で多く移出された。この楮は天然に存在した山楮と人工的に栽培した真楮があったが、当時は山楮が多かったと思われる。三極の栽培も行われたようであるが、まだ生産量も少なく、移出も行われなかったようである。

山村住民の移入額の多いものは衣類・清酒・タバコ・焼酎・売薬・塩・機械器具・農具・魚類(塩・焼・干魚を含む)、石油などとなっていた。この中でタバコは一部の山村で生産されたが、大体においてタバコの移入額は高い位置を占めた。在郷町の主な移入品目は魚類・衣類・薪・木炭などで、一部の町では米・あわ・むぎの穀類を多く移入していた。山村の薪や木炭は在郷町へ移出され、在郷町の酒類やタバコが逆に山村へ移出された。

三、穀類の生産と消費

九州中部山村の焼畑では雑穀が多く生産され、過小生産である米を補足していた。一二の山村の中では主食としての消費は米と大麦ととももろこしの組合せが多く、西米良村ではとももろこしの代りにひえが、山西村と矢部村ではとももろこしの代りにあわが大量に生産されていた。また大麦の代りにはだか麦が多く生産された村として西米良村・南小国村・柏村がある。明治三〇〜四〇年における山村の主な食糧の一人当り年間消費量を平均すると米(四・四六斗)、麦(五・一九斗)、ひえ(一・三三斗)、あわ(二・三四斗)、きび(〇・一一斗)、そば(〇・八八斗)、とももろこし(四・七六斗)、めん類(一五六匁)、さといも(二六貫二六匁)、かんしよ(一九貫六〇三匁)、ばれいしょ(九一匁)となる。南小国村のように米の消費の多い村では、雑穀やいも類の消費は少なくなっている。米や雑穀の消費量の多い村は西米良村・柏村・上野村・矢部村などであり、消費量の少ない村は椎葉村・鞍岡村・七折村などである。

一二の山村の食料品支出の割合を平均すると、穀類五一・一二%、酒類一〇・九%、そさい類一〇・四六%、肉・魚貝類四・二一%、タバコ三・五三%、いも類二・七六%、豆類二・六%、果物類一・五七%、その他一二・八五%となる。穀類の支出割合が六〇%を越えているのは矢部村・南小国村・柏村である。穀類・そさい類・酒類の三種で食品類の中で占める割合は七割を越えている。これに對し在郷町(八ヶ町)の場合は、穀類五一・八八%、酒類一三・五五

表2 明治30～43年の米の1人当り年消費量(主食)

101～200	○岩戸村	河内村	○諸塚村	○七折村	卓部村	野尻村	上野村	白木村	清里村	鞍岡村	錦野村	西国村	○椎葉村
201～300	守富村	豊野村	東野村	年禮村	海東村	田原村	○山西村	清水村	○鞍岡村	○錦野村	西国村	○椎葉村	
301～400	豊福村	豊川村	東野村	高尾村	○三ツ所村	宮尾村	○西国村	高田村					
401～500	中山村	○外野田村	松鶴町	○西米良村	○柏	○東加田村							
501～600	杉上村	小川町	豊田村	○西米良村	○柏	○東加田村							
601～700	○矢部村	腰庄町	石岡村	三在村	八幡村	竹中村	果の村	大淵村	賀米村				
701～800	永水村	尾ヶ石村	坂梨村	黒川村	東加田村	高尾町	竹野村						
801～900	上池北村	長陽村	高森町	山田村	中道村	桃岡村							
901～1000	杉合村	産山村	○南内國村	黒木町	豊岡村								
1001～1100	住吉村	宮崎町											
1101～1200	久米村	西牧村											
1201～1300	古城村	馬見原町											

(注) 米は水稲・陸稲の雑米・糯米を含む。町村足の資料により算出。米は玄米品。
○印は本報でとりあげた山村・福岡・熊本・大分・宮崎・鹿児島各県の町村が含まれている。

、そさい類五・六五%、肉り魚貝類五・五七%、タバコ四・四四%、いも類二・四三%、豆類一・四二%、果物類一・一六%となる。

ここで顕著な相違は、そさい類は在郷町の消費が山村の半分であり、それに対し酒類・肉り魚貝類・タバコが山村より在郷町の消費が上回っている。当時の山村ではいかに多くの穀類を消費したかがわかるし、豆類といも類は山村・在郷町を問わずほぼ同じ割合で消費された。

穀類の生産で注目すべきは、焼畑耕作により何が最も多く生産されたかである。ひえは西米良村できわめて多く生産消費されており、それについて「ひえつき節」で名高い椎葉村がくるが、西米良村に比してはるかに少なかった。あわは山西村・矢部村で多く生産消費され、とりもろこしは相村、三ヶ所村・上野村・鞍岡村・岩戸村・

七折村・諸塚村で多く生産消費された。

四、米の生産と消費

九州中部山村が米の生産地域ではなかったが、米の移出地域であった村もあり、木材・薪などの林産物やしいたげ・茶・楮皮などの山産物の商品化率の低い山村にあっては、米が現金収入源のもっとも重要な産物として、生産販売が行われてきた。九州(福岡・熊本・宮崎・大分・鹿児島各県)管内の七二町村の明治三〇～四三年の米の一人当り年間消費量(主食)をみると、三斗台が最も多く、次いで四斗台と八斗台が多い。山村では米の消費量は六斗未満の村が最も多く、割に高いのは南小国村の九斗台である。南小国村は山村の中でも鞍岡村とともに水田化率の高い村であったが、他町村より

第3表 食料品支出の構造

村名	穀類	そさい類	豆類	いも類	果物類	魚貝類	肉類	酒類	タバコ	その他
鞍岡村	43.9	17.0	2.1	0.5	1.3	3.1	0.8	9.4	6.1	15.8
三ヶ所村	48.4	14.9	2.7	1.7	0.9	3.0	0.4	8.4	3.5	16.1
西米良村	48.8	13.9	3.4	3.0	2.2	4.1	3.7	11.6	4.5	4.8
岩戸村	48.1	11.2	2.5	4.4	2.6	3.0	0.7	7.6	3.3	16.6
七折村	45.3	10.8	2.6	6.3	0.9	4.2	0.5	12.5	3.3	13.6
上野村	51.4	9.7	2.1	3.0	3.3	3.3	0.6	8.4	3.0	15.2
諸塚村	46.9	6.9	2.2	3.1	0.8	3.1	0.8	12.8	3.6	19.8
椎葉村	44.7	18.6	6.3	2.9	2.7	3.9	1.8	7.2	4.6	7.3
南小国村	63.0	6.6	1.2	0.3	0.8	3.0	1.0	10.4	2.6	11.1
柏山村	62.6	6.7	2.0	1.9	0.9	2.0	1.3	11.8	1.6	9.2
山西部村	45.7	2.5	2.1	4.2	1.6	2.2	0.9	20.8	3.6	16.4
天部村	64.8	6.7	2.0	1.8	0.9	2.0	1.3	10.0	2.8	7.7
平均	51.1	10.5	2.6	2.8	1.6	3.1	1.1	10.9	3.5	12.9

所有される土地も少なく、米を一部移出しても自村内で多くの消費が行われた。米一日三合消費した場合、年間一石九斗五升必要になるが、これを越える消費量を示した町村は、宮崎県の宮崎町、熊本県阿蘇郡の久木野村、内牧村・古城村・馬見原町で、馬見原町は最高の一石二斗六升であった。馬見原町は清酒醸造業六戸、焼酎醸造業六戸というように酒のためにも米が多く消費され、明治三四年には一五二五石七斗四升六合がそのために消費された。明治三四年の馬見原町の主食用の消費米は二七一四石四升であり、米の生産量は

小作米としての収入を含めても二三四八石四斗八升九合しかなかった。かなりの米不足となった。馬見原町の移入品目をみると米が第一位で一五八二円五三銭の移入額であった。

一二の山村における米の生産量と主食としての消費量を比較すると、矢部村・諸塚村・椎葉村がマイナスの差額を示し、プラスの差額を示すのは南小国村・山西村・鞍岡村である。米の反当収量も山西村は山村の平均よりも高く、南小国村と鞍岡村は平均よりも低いので、プラスの差額を示すのは作付面積が広いが、消費量が著しく少ないかである。水田面積も南小国村・山西村・鞍岡村は一二の山村の中でも面積は広い方である。

ところで米の生産量と主食としての消費量の差額は、そのまま米の移入額を示すものではない。そこで米の移入額を調べるために、米の集米量と散米量を算出してみた。集米量とは米がその村にどれだけ集められたかであり、散米量とは米がどれだけ消費されたかである。集米量は米の生産量と小作米収入と掛作米収入とを合計したものである。掛作米収入とは、他町村の地籍内における自作地及び小作地からの収益で、もちろん小作米を除去したものである。つまり掛作とは他町村の土地（自作地または小作地）へ出作りをすることである。散米量とは主食用の米消費量・小作米支出・掛作米支出・酒類材米・味噌材米・餡材米・酢材米・粉米を合計したものである。米の集米量と散米量の差額は、米の移出入額を示すものである。そこで米の動きを分かりやすくするために、散米指数を求めてみた。散米指数とは集米量を一〇〇とした場合に散米量がどれだけになるかを示した数値で、散米指数が高ければ消費量が多かったことである。

り、低ければ消費量が少なかったことになる。十二の山村の散米指数は鞍岡村三〇、山西村三九、岩戸村六〇、上野村七五、南小国村八〇、三ヶ所村八二、西米良村九九、柏村一〇〇、七折村一〇〇、椎葉村一〇八、諸塚村一二〇、矢部村一二七となる。散米指数が一〇〇に近ければ米の移出入があまりなかったことであり、散米指数が大きくなれば米を多く移入した村である。

ここで米の移出入を中心に山村の地域類型を考えると大変興味ある結果がえられる。大きく分ければ、米を移出する型、自給自足型、米を移入する型に区分できる。これを散米指数の上から次の五つの地域類型を設定してみよう。(A)、米穀多移出型(散米指数〇〜四〇)、(B)、米多移出型(散米指数四一〜八〇)、(C)、自給自足型(散米指数八一〜一二〇)、(D)、米多移入型(散米指数一二一〜一六〇)、

(E)、米穀多移入型(散米指数一六一〜)となる。ここで五つの地域類型がどのような山村の特徴をもつか考えてみたい。

(A)、米穀多移出型

この型に属する山村としては熊本県阿蘇郡山西村と宮崎県西臼杵郡鞍岡村がある。山産物の商品化が不十分で、商品作物も現金収入源としては貧弱である。商品作物として前者には葉タバコ、まぶが、後者には大麻、なたねが導入されているが、現金収入源としては貧弱で、山産物も前者は杉材、後者はしいたけ・木材・竹材がある位で商品化は不十分である。いまわい現金収入源として米に頼らざるをえず、山西・鞍岡両村とも米の移出額が総移出額の六割を占めている。このタイプの山村は米依存型山村と言えよう。

鞍岡村は移出品目の第一位が米で明治三八年には米の移出額二二三

表4 主食1人当り年消費量(明治30~40年)

品目	村名	鞍岡村 (円)	三ヶ所村 (円)	西米良村 (円)	岩戸村 (円)	七折村 (円)	上野村 (円)	諸塚村 (円)	椎葉村 (円)	南小国村 (円)	柏村 (円)	山西村 (円)	矢部村 (円)	平均 (円)
米		3.91	4.22	5.88	1.79	2.72	3.40	2.59	3.22	9.93	5.99	3.28	6.57	4.16
大麦		3.62	5.58	1.16	5.30	3.01	7.00	4.84	4.45	0	0.55	0	0	5.19
はだか麦		0.01	0.01	3.91	0.26	1.03	0.61	0.76	0.28	3.15	1.32	4.17	2.63	
小麦		0.06	1.09	0.02	0.76	0.87	2.40	0.35	0.13	0.73	0.77	0	0.43	1.33
ひえ		0.06	0.42	11.13	0.04	0.15	0	1.24	1.85	0	0	0	0.75	
あわ		0.02	0.45	1.22	0.39	1.33	1.42	1.00	0.58	1.43	0.17	10.11	9.90	2.34
きび		0.01	0.16	0	0.22	0.14	0.38	0.05	0.12	0.07	0.12	0	0.01	0.11
そば		0.05	0.74	2.01	0.35	0.25	0.37	0.92	2.55	0.34	1.98	0.14	0.82	0.88
とうもろこし		6.47	6.97	0.37	6.28	5.45	6.47	4.83	3.36	1.74	14.78	0	0.34	4.76
		(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)	(円)
めん類		0.161	0.217	0.100	0.189	0.072	0.307	0.215	0.446	0.079	0.041	0.038	0	0.146
さといも		36.400	32.727	15.970	34.289	16.521	17.064	13.370	53.580	19.321	25.103	3.103	17.200	26.226
かんしょ		2.375	8.714	23.600	24.361	54.222	23.468	29.360	27.470	0.933	4.360	28.982	7.331	19.003
ばれいしょ		0.123	0.119	0	0.046	0.002	0.101	0.026	0.481	0.193	0	0	0	0.091

注) 各村是の資料により筆者計算、米は梗米・糯米の玄米量を合計したものである。

表5 九州中部山村の集米量と散米量(明治後期)

村名	集米量 (石)	散米量 (石)	差額 (石)	散米指数
鞍岡村	2432.063	738.063	1694.000	30
三ヶ所村	1787.255	1457.255	330.000	82
西米良村	1559.611	1548.028	11.583	99
岩戸村	1295.157	771.060	524.097	60
七折村	1184.410	1184.410	0	100
上野村	1343.675	1009.420	334.255	75
諸塚村	940.000	1130.840	-190.840	120
椎葉村	1896.150	2052.250	-156.100	108
南小国村	7663.714	6146.805	1516.909	80
柏村	2582.830	2570.585	12.245	100
山西村	4120.980	1591.255	2529.725	39
矢部村	2217.704	2822.120	-604.416	127

注) 集米量=米の生産量+小作米収入+掛作米収入
 散米量=米の消費量(主食)+小作米支出+掛作米支出+酒類材米
 散米指数=散米量×100/集米量
 各村是の資料により筆者計算

一六九四九二銭と全移出額の五六%を占めて、農村型山村と言える。移出品目をみても米・大麻・なたねなどの農産物移出額が、しいたけ・木材・竹材などの林産物移出額をかなり上回っている。鞍岡村は水田率一一% (実際には六%位) というように山村の平均水田率五%を大きく上回っている。鞍岡村は他町村に所有する土地が三町六反二畝三步(水田は一反三畝二一步)に対し、他町村より所有される土地が二五七町一反二畝一五歩(水田は五六町一反五畝一〇歩)と非常に多い。とくに他町村所有の水田が非常に多く、当然小作農も多くなり、貧しい山村となる。鞍岡村是に記された将来の七ヶ年計画では、増産額の大きい順に並べると、米、養蚕、畜産、大麦、しいたけ、楮皮、こんにゃく玉となっており、米を筆頭にあげてあ

表6 九州中部山村の地域類型(明治後期)

類型	散米指数	地域	特徴
A 米夥多移出型	0-40	山西村, 鞍岡村	山産物の商品化が不十分。商品作物も現金収入源としては弱い。
B 米多移出型	41-80	南小国村, 上野村, 岩戸村	主食としての消費量の多い村と消費量の少ない村がある。
C 自給自足型	61-120	柏村, 三ヶ所村, 七折村, 諸塚村, 西米良村, 椎葉村	米を中心にした穀類の移動が少ない。
D 米多移入型	121-160	矢部村	山産物の商品化が充分に行われている。
E 米夥多移入型	161-	なし	

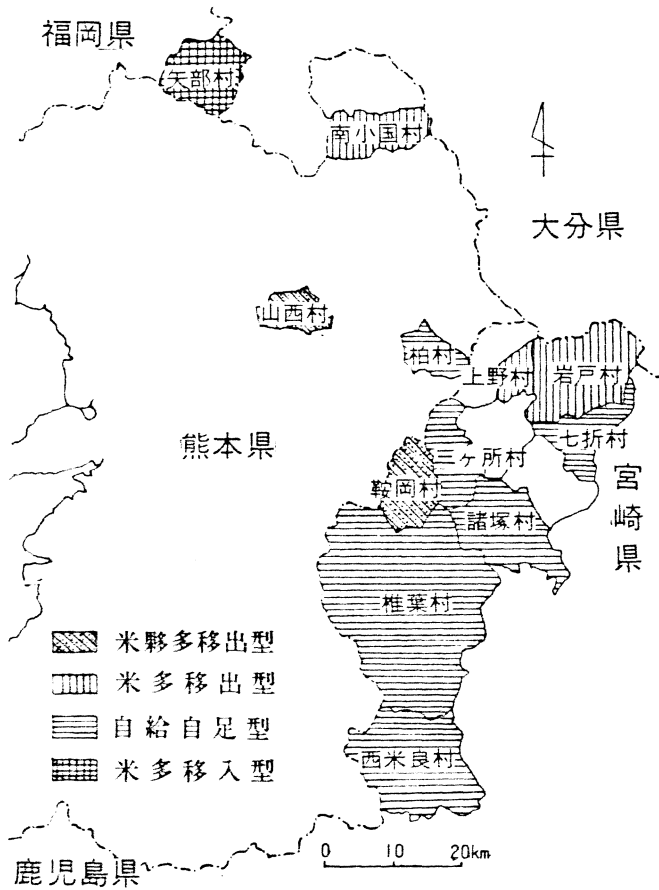
る。しいたけ、楮皮、こんにゃく玉の山産物は下位にあげられており、しいたけ(移出額第三位)を除いてこれらの商品化率は低い。ところで当時の町村是に記された将来の方針で一つの大きな特色は、国策上養蚕業を全国的に奨励していたために、いまだ山村にはわずかしが導入されていなかった養蚕業を盛んにするよう力説されていることである。一二の山村のうち一〇の山村が養蚕業をとりあげており、鞍岡村でも米について増産額の第二位に養蚕業をあげてある。一方鞍岡村に導入された大麻・なたねなどの商品作物の生産については、それらが現金収入源として当時重要な産物であったにもかかわらず、全然とりあげられなかった。村是の決定にあたって村民が導入していた商品作物を軽視して国策に協力しようとした態度は、当時の村民が充分納得することができたであろうか。

(B) 米多移出型

このタイプの山村はさらに細かく二分されよう。一つは、米の生産地域でもあり主食としての米の消費量も多いが、米を多く移出する村と、他の一つは、米を多く生産する地域でもなく、主食としての米の消費量を少なくして、米を多く移出する村の二つである。前者には熊本県阿蘇郡南小国村が、後者には宮崎県西臼杵郡上野村と岩戸村が属する。

まず熊本県阿蘇郡南小国村について考察する。南小国村は杉・松

竹・茶・しいたけなどの林産物や山産物の移出も多く、米も多く生産してその一部を移出した村である。南小国村には「本村ハ貧富ノ懸隔比較的少ナク又甚シク貧ナラスト雖モ固ヨリ富有ナルニアラズ。」として、明治三四年の歳入金額三三五七〇五円五三銭六厘（一人当たり金額六七円一〇銭一厘）に対し、歳出金額三三三九〇円八八銭八厘（一人当たり金額六七円八三銭七厘）と若干の赤字の村である。歳入金額を村人口で割った一人当たりの金額を一人当たりの村民所得と考えれば、南小国村は一二の山村の平均より約六円位高い。



九州中部山村の地域類型

南小国村の常食については村是に次のように記されている。一常食ハ一般米麦粟玉蜀黍ノ穀類ヲ混同シテ喫ス。就中米穀ヲ食フル事多ク玉蜀黍ヲ炊ク事少シ。一南小国村の明治三四年の主食の一人当り年間消費量は、米九・九三斗、ただか麦三・一五斗、とうもろこし一・七四斗、あわ一・四三斗、小麦〇・七三斗となっており、米の消費料が多いので雑穀の消費料はあまり多くはない。

村是として南小国村の将来一〇カ年計画の方針として打ち出されたものは、米・養蚕・麦・畜産であり、長期的には植林事業を奨励しつつ、

短期的には米を中心とした農業生産に重点がおかれていることがわかる。しいたけと茶の山産物が当時の移出品目として重きをおいていたにもかかわらず、その将励については将来計画の中に一言もふれられておらず、代りに養蚕業が奨励されていることは前述したように国策を忠実に実行しようとしたからである。

次に主食としての米の消費量を少なくして割合に多くの米を移出する村として、上野村と岩戸村があげられる。上野村は木材としいたけの山産物があるも現金収入は不十分で、商品作物として大麻・タバコ・まゆがある。岩戸村は山産物として椎茸・木材・木炭があり、とくに椎茸の生産量も多いが、住民のフトコロを豊かにするほどではない。商品作物としては大麻・タバコがあるが、米も多く販売して現金収入を補充している。

岩戸村は、筆者が調査した明治三〇〜四三年の七二町村の米の一人当り年間消費量の中で最も低い値を示した。すなわち岩戸村は、一・七九斗で、これとほぼ似た程度の米の消費量の少ない村は一・九三斗の熊本県飽託郡河内村であった。岩戸村はこの米を補足するために年間一人当り大麦五・三斗、とうもろこし六・二八斗を消費し、さらにさといもとかんしょで食糧の不足を補っている。岩戸村の食料品支出の構造をみると、穀類の消費が一二の山村よりやや低く、それを補足するためにいも類が多く消費され、そさい類の消費がやや多く、肉・魚貝類の蛋白質がやや少なくなっている。村是に記された将来の七ヶ年計画では、増産品目として畜産・米・しいたけ・柀柳・養鶏・こんにゃく玉・養蚕があげられている。

(C) 自給自足型

このタイプに属する山村としては、熊本県阿蘇郡柏村の他に、宮崎県西臼杵郡三ヶ所村・椎葉村・諸塚村・七折村と児湯郡西米良村があげられる。この中では椎葉村と諸塚村が米を少し移入し、三ヶ所村が米を少し移出している。このタイプでは西米良村を例にとろう。米良荘でも西米良村は歴史的にも熊本県球磨郡との関係が密接であり、横谷峠を越えて湯前・多良木・人吉方面との取引が盛んであった。明治期には、ようやく交通網が整備され、西都市杉安と西米良村の村所間の道路が明治三三年に改修され、熊本県側からの県道は明治四三年までに改修された。こうしてようやく米良荘の物品が多く移出されるようになった。明治二四年の移入品としては焼酎と酒（六四％）、米（一四％）、呉服（九％）が八七％を占め、移出品としては木材・しいたけ、アンチモニーが九〇％を占めた。移入品は人吉・多良木・湯前から全部入荷しているが、日常雑貨品の他に食糧として米一八〇石、麦三石、大豆・小豆など三石、そうめん六〇〇貫が移入されている。これをもみても当時まだ食糧が充分自給できなかったことが理解される。これら食料の移入金額は一三四四円となり、茶と楮皮の販売金額を上回る金額であった。

移出品ではアンチモニーを除けば、木材・しいたけ・茶・楮皮が代表的なもので、西米良村民の現金収入源としては、これら三種が安定した恒常的な収入源であった。さらに乏しい現金収入を補足すべく木材（けやき材・松材・もみ板）の搬出が行われたと考えられる。移出先は、しいたけ・楮皮・茶の山産物が人吉町へ出荷され、そこからさらに大阪・長崎へ再出荷された。人吉町へは横谷峠を越えて人肩・馬背による駄賃付け輸送を行っていた。木材は一部加工

したものを除いてはすべて一ツ瀬川を川流しにより河口の福島港へ出荷しており、流し山師が活躍していた。木材は福島港からさらに神戸・大阪へと運搬された。アンチモニーも馬背・人肩により福島港へ運ばれ、そこから神戸・大阪へと搬送されていた。こんにやくが国富町の一部である本庄へ出荷され、そこを經由して宮崎町へ運ばれた。

明治三〇年の移出入状況のみより。この資料は熊本県球磨郡との取引のみを示すものであり、一ツ瀬川下流域の穂北・妻・佐土原との取引を示す資料が加えられていない。しかし明治二四年の移入先はほとんど熊本県球磨郡からであるから、明治三〇年の資料も木材や酒の取引などを除けば、西米良村の商取引の大勢を示す資料であることは間違いない。移入金額の多い品目は、米(三五・二%)、焼酎(三一・八%)、食塩・太物・小間物・石油などで日常生活必需品がほとんどである。明治三〇年には米七二三石六斗、麦一九石、そうめん一一五貫が入荷している。とくに米の移入量は明治二四年に比べていちじるしく増加した。明治三〇年でも食糧の自給はおぼつかなく、むしろ積極的に移入しており、食糧不足は解決していない。水田面積も明治一〇〜二〇年代にかけてはいちじるしく増加しているが、二四〜三〇年にかけては約二町歩位の増加で一応限界に達している。人口は明治二三年に二一〇七人であったものが、三一年には二二八九人となり、約一八〇人の増加となっているので、食糧不足は一層深刻なものになったであろう。

明治三〇年の移出品目の中でもっとも多いのは椎茸(三六・四%)、かし板(一八・〇%)、もみ板・とが材・松材・けやき板・楮皮な

などである。つまり椎茸と木材と楮皮が現金収入源であった。これは明治二四年の移出品目とあまり差はないが、茶と牛が入れ替っており、茶が自然茶(山茶)を主体にしていたために商品化率が低かったことがわかる。

明治四〇年の移出入の状況を西米良村はよってみると明治三〇年に比べかなり大きな変化がみられる。まず移入品目の中で上位を占めていた米を中心にした食糧が全く姿を消し、むしろ小豆のようにな移出品がでてきたことである。つまり明治四〇年には食糧の自給が可能となり、そのため移入された日常雑貨品の中でもタバコ・農具・飼料・機械器具など新たな品目が登場してくる。これに対し移出品目は木材・しいたけ・木炭・楮皮が主体となり、この頃から木炭が現金収入源の重要なものとして現われる。焼畑産物としては大根・茶・小豆が移出されており、明治二四年頃はせいぜい茶位しかなかったもので、焼畑地が商品生産の場と化しつつあることが窺える。木炭生産は明治三三年の県道改修により移出が伸びたもので、横谷峠を越える村所―湯前間のルートでは激張る割に値段は安く運賃が高くなる木炭は採算が合わなかった。しいたけ・茶・楮皮は製品も軽く、山道を搬出するのに便利であったので現金収入源としても重きをなした。

米良荘の社倉は明治三八〜四三年頃にもっとも多く設置されていた。明治二四〜三〇年の移入品目をみても米を中心に食糧の移入量が多く、この乏しい食糧問題を解決する一方法として社倉制が普及していったことが考えられる。明治一八〜三八年にかけて社倉の設置が行われ、明治四〇年頃に食糧自給が可能になると社倉が漸次廃

されていったことがこのことをよく裏づけている。明治三〇年頃までは貯穀もひえが圧倒的に多く、これについて粃米・そば・小豆などが貯穀されていた。

④ 米多移入型

福岡県八女郡矢部村がこれに属する。山産物の商品化が充分に行われており、それにより米・あわ・はだか麦の穀類を移入した。矢部村は水田率六割で米の生産は少ないが、一人当り年間消費量は米が六・五七斗、あわ九・九斗、はだか麦二・六三斗である。あわを多く消費したのは山西村と矢部村でとうもろこしの生産が少なかった。矢部村の移出品目は茶・こんにゃく玉・木炭・楮皮・そば・山芋・はぜの実などの山産物と木材・竹材の林産物の商品化が進んでいる。それによって矢部村はあわ・米・はだか麦の穀類を多く移入しており、このようなタイプは山村としての性格をよく表わす。矢部村が山茶を多く販売していたことは、その後八女郡が八女茶として名声をはくすることにもなる。

矢部村も他町村に所有する土地は五町六反七畝五歩（水田一町四反五畝二四歩）に対し、他町村より所有される土地は三二町四反一畝（水田八町一畝二九歩）と非常に多かった。矢部村の穀類消費は六四・七八割と非常に高く、食料品支出の中で穀類に依存する度合が非常に高かった。将来の七ヶ年計画としても茶と林業に多くを依存し、米・はだか麦・あわの穀類を増産して、穀類の自給度を高めようとしている。

五、結言

山村における水稻の生産は遅れて出発したと言わねばならない。山村における労働力の不足、あるいは土木的技術の未熟さ、開田資金の不足から開田可能地も水田として利用されることが少なかった。明治期には開田事業が著しく進み、米の生産に重点がおかれたため山村にとっても米が商品作物として重視されたのである。山村が自給的色彩の濃厚な焼畑村から解放されるようになったのは米が商品作物として生産されるようになったことが一つの要因となる。山村が雑穀生産の場である限り、自給的山村からの開放はなかったのである。山村住民が伝統的な食生活を踏襲して雑穀を主食にし、米を商品作物として生産したとしても不思議ではない。たとえばひえと米の混食であるひえめしは今日ではまづいといわれるが、その当時ひえめしをおいしく食べる料理法が長年の食生活の中から考案されており、雑穀を主体にした食生活であっても住民はそんなに大きな不満は抱かなかったであろう。

本報でとりあげた明治後期の九州中部山村における生産と消費の諸特徴を要約すれば次のようになる。

①山村が米の生産地域でなかったにもかかわらず、米を多く移出する地域があり、その場合山産物や林産物の商品化が不充分であったので、現金収入源として米に多くを依存せざるをえなかった。これらの山村は貧しい山村であり、米を移出して代りにあわ・とうもろこしなどの雑穀を多く移入した。

②山村における商品作物の導入は一部の山村を除いては充分でなく、わずかに注目すべきは宮崎県西臼杵郡の大麻とタバコ栽培であっ

た。大麻やタバコなどの商品作物が導入された山村では、焼畑農業が比較的早く消滅した村である。明治後期には特産地がすでに形成されつつあり、矢部村の八女茶・南小国村の杉・西臼杵郡(三ヶ所村・上野村・鞍岡村)の大麻などはその典型であろう。

(3)穀類の生産と消費で最も注目すべきは米の生産と消費で、筆者は米の移動を指標にして五つの地域類型を設定した。一二の山村の中では北部の山村が米の移出地域であり、南部の山村が自給自足の地域であった。米の移入地域としては福岡県の矢部村が一二の山村の中で一つだけ存在し、米多移入型の山村が福岡県に多く分布するか否かについては今後の調査にまわりたい。なお米多移入型の山村は水田のきわめて少ない山村の中に、このタイプの山村がみられると思うが、ここで取上げた一二の山村の中には見出されたり。

注

- (1)上野福男「五家荘の焼畑耕作」地理学評論一四―二一九三八年
- (2)佐々木高明『日本の焼畑』古今書院 一九七二年
- (3)三浦保寿「九州山地における焼畑経営隔絶山村の研究」

人文地理四一六 一九五三年

「椎葉村焼畑地帳の歴史地理学的研究」(一)(二)

歴史地理学紀要十一、十四 一九六九年・一九七二年

- (4)千葉徳爾『民俗と地域形成』風間書房 一九六六年

- (5)山本正三「九州山地における山茶の利用形態」地理学評論三〇―十四

一九五七年

- (6)、(4)牧野洋一「宮崎県米良地方の社会制」熊本商大論集四一号 一九七四年

ビエル・ジョルジュ 『消費の地理学』白水社 一九六五年
野田早苗訳

(8)ここでとくに使用した村は次のものである。とくに断わらない限りは各町村是の資料を用いた。

- 福岡県八女郡矢部村是 一八九八年
- 阿蘇郡山西村是 一九〇三年
- 阿蘇郡柏村是 一九〇三年
- 阿蘇郡南小国村是 一九〇三年
- 宮崎県西臼杵郡鞍岡村是 一九〇七年
- 宮崎県西臼杵郡諸塚村是 一九〇六年
- 西臼杵郡岩戸村是 一九〇七年
- 西臼杵郡上野村是 一九〇七年
- 宮崎県西臼杵郡三ヶ所村是 一九〇七年
- 西臼杵郡七折村是 一九〇七年
- 西臼杵郡椎葉村是 一九〇七年
- 宮崎県児湯郡西米良村是 一九〇八年

- (9)一橋大学経研「郡是・町村是調査書所在目録」一九六四年

00 宮崎町・高鍋町(以上宮崎県)、小川町、松橋町、隈庄町、馬見

原町、高森町(以上熊本県)、黒木町(福岡県)の各町是による。

- 01 野田敏夫『西米良村史』西米良村役場発行 一九七三年

02、03 西米良村役場蔵、西米良村役場文書による。

The Production and Consumption of Goods in Mountain Villages
in Central Kyushu, Western Japan, during the Late Meiji Era
Yoichi MAKINO

The primary object of this article is to delineate the character of the life in mountain villages in central Kyushu during the late Meiji Era by comparing the production and consumption of various goods. The source materials analysed are so-called 'Choze' and 'Sonze' published at the turn of this century. They contain valuable informations not only on the agricultural and industrial products but also on the consumption of foods and miscellaneous goods.

Even in this mountainous region where paddy fields were scanty, some of these villages sent out rice produced to other areas. In the villages of this kind, the output of forest products like timber and firewood and such commodities as tea, mushroom and so on was not so large that rice necessarily became the most important source of cash income. Taking this fact into consideration, the author classified the villages in this region into five groups according to the production and consumption of rice.

第二一回大会の巡検について

四月二日坂戸・毛呂山・越生付近巡検

集合 東上線坂戸駅北口、九時二〇分、出発九時三〇分

参加費 二〇〇〇円（昼食代を含む）

案内者 田村正夫君

コース 坂戸駅―坂戸旧市街地（「まどうち」・「まどそと」）

―北坂戸団地―鳩山ニュータウン―今宿―川角―城西大学―角

栄団地―長瀬団地―毛呂―鎌北湖―権現堂―阿諏訪―滝ノ入―

越生―黒山三滝―越生駅（城西大学スクールバス利用）

解散 午後四時三〇分

所要地形図 二・五万分一 川越北部・越生・飯能

定員 四〇名

申込み 参加希望者は参加費を添えて、城西大学経済学部地理学

研究室田村正夫（〒三五〇―四、坂戸市けやき台一―）宛

お申し込み下さい。定員に達し次第締切ります。